

〈対談〉

「希望」を語る

【小さな世界からのメッセージ】

イバン・イリイチ+石牟礼道子

(一九八六年十一月八日 於・京都龜岡・大本)

「母郷」としての水俣——『椿の海の記』の背景

イリイチ 石牟礼さんの作品を読んでいちばん印象的なことは、私たちが生きていく中で出合う恐怖、暗示録的ともいべき恐怖に対する答えが叙情的に、いわば心から描かれていることです。そういうすばらしい例を石牟礼さんの作品が提示していると思います。

私は『椿の海の記』という作品からいちばん感銘を受けました。どうしてこの作品が生まれたのか、それについてお話しただけますか。

石牟礼

『椿の海の記』は、まだ水俣病を知る前の水俣という

風土と、私がそこで育ちましたので、半分自伝的な作品なんですが、最初の作品が『苦海淨土』といいまして、これはそのものずばり水俣病を書いた作品ですが、ぜひとも水俣病を経験する前の水俣という風土に代表させて、この国、私に考えられる範囲での海辺の世界と、そのあたりの人びとはぐくみ育ててきた風土について書きたく思つておりました。

先ほどもお話ししたしましたが、近代文明の行く末の予兆として水俣病が起きました。日本は、ヨーロッパにあこがれて、百年ぐらいかかるて一路近代化に邁進してきましたが、その日本近代を象徴する大都市、中央という意味で東京と云つた方がいいんですが、そこに日本の知的水準のほとんどは集まつていると思われ

ます。けれどもそういういわば都市市民的選良たちを生み、育み、送りこんできたのは、実は田舎というか、辺境の心だったのではないかでしようか。田舎に残つた者たちはそれが自分らの役目、つとめだと思ってきたのではないでしようか。チツソ幹部というのも、ある意味で日本の化学産業界の、いちばん進んだ水準を表していたと思われます。そういうレベルの人材を、百年ぐらい前から産み続けてきた故郷、というより『母郷』という言葉を使つたんですけど、母なるふるさとの典型として水俣を書きたかったのです。

たんなる故郷というのではなくて、日本人、日本近代の母郷でござりますね。近代文明の未来を水俣が予兆しておりますので、痛切にそのことが思われます。水俣に限りませず、村の有用な青年子女たちのほとんどは都市に、ことに東京に集中していつたという歴史がありました。そしていまのような近代文明が成立したわけですが、それを担つた選良たち、選ばれた近代の担い手たちを産み出したのは田舎なんですけれども、その田舎を背負つて、水俣が水俣病になつちやつた、という思いがわたしの中にありますので、そこで水俣を母郷として絞つて考えたい。ずっと私はそう思つて書いているんですけど。

イリイチ この対談を始める前にわかつたことですが、石牟礼さんはぜひ、高い教養のある日本人には理解できない言葉で、つまり方言で私と話しかけていらっしゃる。

このことから私はわかつたのです。これを「母郷」といつてよ



いかどうかわかりませんが、あなたの心から語り出すものは、日本語ではなく、ひとつまつたく特殊な方言なのです。あなたの心は、この島のこの地域のように語るのです。これが、私が石牟礼さんから理解したことですが、まちがっているでしょうか。

これはちょうど、『権の海の記』が『苦海淨土』よりも、もっと強力に私に訴えかけてくるのと同様です。この作品を書かれた人は、海草をよく知つており、どこの海草が一番みずみずしいか、どこのがおいしいか、しかも、非常に寒いある冬の日によく海草がよくとれるか、といったような生活に密着したことによく知つている人だということです。

この人は、日本を代表して語つているのではなく、あるまつたく具体的な地方（風景）の証人（目撃者）として語つているのです。この人は、母なる大地から産まれてきたものであって、空想的な母なる神性、つまり日本から産まれてきたのではありません。まちがっていますか。日本という空想からではないのです。

石牟礼 私自身が土地という自然の一部というか、風土の精

靈という気がしています。

イリイチ 私は、この作品を非常に注意深く読みました。そしてこの本のたくさん箇所で、私は目をつぶつて、思い出そつとしますと、私が、海草や蘆木や砂浜やひよつとし走り去つていく小さな狐ではないのか、とわからなくなります。

石牟礼 ああ、その場面のことをさつきおつしやつてたのですね。わかりました。そういう箇所がありました。

がよくみました。そして、終末のただ中に置かれていても人間というのはなおかつ莊嚴であるということを知りました。

極端な言い方かもしれないが、水俣を体験することによって、私たちがいままで知つていた宗教はすべて滅びたという感じを受けました。人類が自分の歴史を数えはじめてから、二十世紀という長い時期を支えてきたその宗教史において、宗教を興してきた人々はつねにその受難とひき替えに宗教を興してきたわけだしとうが、もし二十一世紀以後があり得るとすれば、水俣の人々が体験した受難は、次の世紀へのメッセージを秘めた宗教的な縦糸の一つになるかもしれません。つぎにくる世紀がそれを読み解けるかどうかわかりませんが。

イリイチ そのことに關しては、今日の午前中の出口和明さんとの対談でも出ました。その対談は宗教が中心テーマになつていたのですが、私は彼に次のようにいいました。「宗教という概念でいつ自分が何ができるのかわからない」と。

私は不安ですが、この作品のすばらしい箇所は、なんかの意味で宗教性、あるいは宗教と関連しているところにあるのではないかと思います。それらの箇所を宗教として解説すると、突然普遍的なものとなります。そのものをまさにぴったりと、日本語で、九州弁で、英語で、しかもエスペラントでいえます。本書のもつともすばらしい箇所に宗教を探したら、その箇所を壊すのではないかと心配です。というのも、この箇所は、まったく特殊に局地的な感覚をもつていています。それは、一人の女

イリイチ この作品を正しく理解しているかどうかを知るために、質問を続けたいと思います。この作品には「チツソ」は出てこないし、破壊ははつきりした形では出できません。まだ支配的な形では出できませんね。

しかし、私は次のような印象をもっています。私が石牟礼さんを知らず、水俣が私にとって何の意味も持っていないとしても、私は悲しみについてのまつたく特殊な感覚をここで読みとりました。それは美的感覺です。それは、文体・様式の中になります。言明の中にではありません。この悲しみは言葉では捉えられないのです。それは響きであり、文体の中になります。

そこで、石牟礼さんにお尋ねしたい。あなたは、どうやってこのような悲しみに対する勇気を手に入れられたのか、その秘密をもしできれば教えていただきたいのですが。

水俣の受難——『苦海淨土』の世界

石牟礼

秘密はありませんが、この作品は『苦海淨土』を書

いたあとで書きましたので、前の作品のことを言わなければちょっと説明できないんですけど、『苦海淨土』では、その世界を書くことによって、私自身も水俣病そのものを追体験したわけです。人類がはじめて体験した、誰もしなかつた体験でしたし、このことを徹底的に考え、作品を書くことによって人類の終焉・終末、人間の心の衰減をみました。被害民たちをとり巻く情況の中にそれは反対です。

石牟礼

宗教ということでは、キリスト教以前の、たとえばドイツではハイネが『精霊物語』という作品を書いておりますが、アニミズムのようなもの、庶民の中に教団化の形をとらない宗教的な衝動というものが非常に深くしのばせてあります。それは今日はどういう意味を持つのか、バーバラ・ドゥーデンさんとお話ししたかったのですけれども、文字を読む必要がない人たちがもつて生きていぐ力、それをもつと強めた形、靈力とか呪力とかいうことをお話ししたかったのですが、うまくゆきませんで。まあ、そういうものが庶民の中にはじ込められていて、近代化された社会の中ではエリートの地位を占めることのできない人たちの間に、歴史をくぐつて靈力や呪力が蓄えられているのですね。そういうものが出ていくところをみつけることができないで、エネルギーとして潜んでいます。そのようなエネルギーは、出口をみつけると、何世紀めかに噴出しますが、それは日本にも大本教というようなものもあるんですが、そういうとらえがたい靈力みたいなものを、この作品を書きました時に、歌というか狂気というような形で書きたいなと思っていました。

宗教的な何かがやつてくる前の潜在的な予感として書ければいいなど思いました。ですから、さつきそういう勇気はどうして出たかとおっしゃいましたが勇気というより、私自身が憑かれていた状態で書きました。

今もそうですが次の世紀は、人類があまり体験したことのない時代がくるでしょう。いま大変動の時代ですので、どういう世纪がやつてくるかわかりません。非常に不吉な感じがしますが、そのことを、過去に対しても、来たるべき世纪に対しても、ほんの小さな個人の胸に宿っている鎮めの悲歌エレシになればという思いがございました。

イリイチ そのことを私はまさにこの『椿の海の記』で学びました。それは非常に悲しいことです。

石牟礼 でもどこかで気持ちよくなつてほしいというのはあるんです、悲しくとも。

イリイチ 作品に流れている悲しみということだけを語つたのではありません。私は勇気について語つたのです。

—— ちょっと補足しますと、石牟礼さんは『苦海淨土』を書きれるまでは、受け病み状態、御自身は水俣病ではないけれども病気のようになつてしまつて、寝込まれたり苦しまれたりなさいた。それからやつと起き上がって書き始められたそうです。

イリイチ そういう話には非常に関心があります。というのは私自身もすでに一度ほど経験しました。私がある本の執筆にかかっていた時、その本である恐ろしいことを書こうとしていたものとして描かれています。ヨーロッパと日本の精神性の違いについてあなたがおっしゃられたことが、私にはわかるような気がします。

この具体的な場所は、あなたによつて、ある精神的な現実として描かれています。私にはよくわかりませんが、あの「カミ」ということばが意味しているようなもの、そう、あのカミのようなものとして描かれています。

こうしたとても具体的な、地域的な、そして精神的な現実に対して、西洋人の三大宗教であるユダヤ教、キリスト教、イスラム教は戦いをしかけてきました。この戦いはいつも宗教の側の勝利に終わるわけではありませんし、これまでつねに宗教が勝利をしめてきたわけでもありません。つまり、大宗教は勝利者ではなかつたのです。

こうした大宗教はつねに勝利をしめてきたわけではありません。もうちょっとヨーロッパのことを話してもいいでしょうか。どうのも、私はこうした問題にずいぶんかかわってきたからです。「ヨーロッパでは」多くの場所で、古い神がキリスト教の聖者の服をまとつてまつられています。そうした神は、いまやクリスチヤン・ネームをもつています。とくにカトリック教会では、儀式がとり行われて、そうした古い神に市民権が与えられます。ちょうど朝鮮人に「日本の」市民権が与えられるように。キリスト教のお祭りでは、古い〔神々〕の儀式が、キリスト教的にとりおこなわれます。

のですが、私ははじめて病気になりました。これは職業的なもので、ものを書く人にとってはよくあることでしょう。石牟礼さんは現実を、現在起こっていることを書いているにもかかわらず、読者はそれは現在のことではなくて、未来のことを書いているような印象をもつ場合があるのでないでしょうか。

病気にならずに未来について書くことは比較的簡単なことです。というのも、未来はまだ現実に存在していないし、苦痛を与えることもないからです。石牟礼さん自身が病気になったということは、この恐怖が未来にあるのではなくて、まさに現実に存在していることを突然発見したからこそ、受け病みという病気になつたのでしょう。それはもの書きとしては非常に同感いたします。

小さな世界に、神は宿る——ヨーロッパ・メキシコそして日本

石牟礼 ほんとうに小さな地域のことを書いているだけですが、ある場所の水の鏡が、宇宙を照らしているということがござります。そこに立てば、自分は宇宙への軸であると実感されます。あらゆる生命は植物も含めて、自分の中にそんな鏡を持つているんではないでしょうか。小さな地域というのは、そういう意味を待つていると思います。

イリイチ ええわかります。あなたはほんとうに、とてもどちらこの神性を毎朝見ることができたし、いまでも見ることができます。ほんとうに見ることができるのです。(メキシコには)ボボカテペトルという火山があります。この火山はちょうど富士山と似たかたちをしているのですが、この火山の頂上の右手前に……もう一つべつの火山があります。その火山は、まるでみごつた女性のようなかたちをしています。女神というのはこの岩のかたちのことです。この女神は毎朝太陽を産み出します。なぜなら、この山は東にあるからです。そして夜になると今度はすべての星と月とを産み出します。また、夜になるとこの女神は太陽をベロリと食べてしまい、朝になると今度はすべての星々を食べてしまふのです。これが、土のなかにたくさん骨があることの理由です。宣教師たちがやつてきたとき、かれらはこの女神をあるマリアに変化させました。このマリアは、古い女神同様太陽にとりまかれていて、太陽はこのマリアから上つてきます。でも、このマリアには子供がいません。「もちろん本物の」マリアには一人の御子がいます。このマリアは子供のいないマリアなのです。宣教師たちはこのマリアをグアダルベと名づけました。グアダルベのマリアと。そして、何千何万ものインディアンがこのマリアに祈りをささげるためにやつてくるのです。

三百年後、スペインに対する革命を行つたとき、革命家たちは、その旗印

にグアダルペを掲げました。そして、共産主義者たちが、一九一七年にソヴィエト的な憲法をメキシコに導入しようとしたとき、

かれらは、グアダルペの名においてそれをなしたのです。そういうわけで、ヨーロッパでは神々は死に絶えてしまったわけではありません。いたるところで、神々はいまでも不屈に生きのびています。その土地の「風土」と関連した独立性を保持しています。神々はみな、位階を上つていき、普遍的な聖者になるのです。神々はみな、社会的に進歩し、成り上がつていくわけです。

石牟礼 蘇り続けるマリアということですが、マリアを借りて、その中に自分たちの神を拝むのですね。地域に小さな形でいる神々というのは、違う顔の神に変身することが日本でもありますし、『古事記』という日本最初の歴史書には、生ま身の人やけものであり、神もある存在が少なからず出でています。歴史の陰にいて、そういう機会をまつて、民衆とのつながりといふことでは、日本の神話だけでなく、いわゆる後進地域といわれている第三世界には、いまお話しになつたようなことは非常にたくさんあるようです。

イリイチ 日本にはまだ、非常に狭い地域に限定された中で、「風土」との神秘的な靈的関係というものが存在しますか。

石牟礼 非常にたくさん存在します、現在でも。が、この関係を破壊してしまいました。この大きな世界宗教は、教会というような宗教的形式をとつて、一般的にいつて日本では

どういう影響を与えてきたのでしょうか。

石牟礼 もちろんキリスト教も入ってきてるんですけど、キリスト教もいくつもの宗派がありますね。十六世紀にザビエルがもつてきましたので、宣教師たちも信者たちもたくさん殺されました。けれどもその後、土俗化した仏教と合体しまして、私の生まれた天草島ではマリアが観音様の姿になりまして、隠れキリシタンと呼ばれる人々が拝んでおりました。その拝まれ方が非常に仏教に、教団仏教でなしに、土俗のそれに似てたとき、信仰はより深くなつたと思われます。教会が啓蒙して仏教から転宗させましても、民衆の方では仏教的にキリスト教をとりこんでゆく形がみられます。観音像のマリア様を隠して拝んでいた信徒たちが、大反乱を起こしたことがございます。その『天草の乱』ですが、旗印は聖杯や天使の図柄でして、古いポルトガル語で、聖体の秘跡を表現したものでした。マリア像ではなかつたんですけど。先ほどのメキシコのお話を伺つて、そのことを思い出しました。そして、三万七千人ほどの反乱軍は、島の人口が半分になるくらい全滅したのですけれど、天草にいた人々の子孫が水俣にも移住するんです。水俣病の被災民は、天草から来た人が多うございまます。そのことは多くの示唆を私に与えてくれます。

が、大変傷の多い作品だと思つています。まだ未完でございましてそのあとを書けるかどうかわかりませんが。

イリイチ もつと先を読みたいと思いますので、続きをぜひ書いてください。

ヨーロッパ世界では、男と女の関係を、私がゲヌスとして理解

している関係を取り戻すことはできないと私は思います。石牟礼 日本でもほとんど不可能ではないでしょうか。いかにそのゲヌス・ロキ、場所の神が、私どもの列島の隅々から追い払われてゆきましたとか。男も女も、近代の悪霊のようになりますが、この二つのことは根源のところで結ばれているのに、そこを食い荒らされているのだと思います。

イリイチ もう一つの質問ですが、世界の非常に多くの人々の間で、まだわずかながらゲヌスの関係の可能性が残つていると思います。ゲヌスの関係を回復するということは、たしかに可能ではないかも知れないけれども、その残像、痕跡は「おき火」のように世界中にあると思います。非常に多くの人々の間で、男女関係がお互いにジェンダーの関係というものを見取つて、お互い息を吹きかけてその「おき火」をおこせば拡がつていくのではないかでしようか。そういうことはあると思う。この考えは間違つているでしようか。

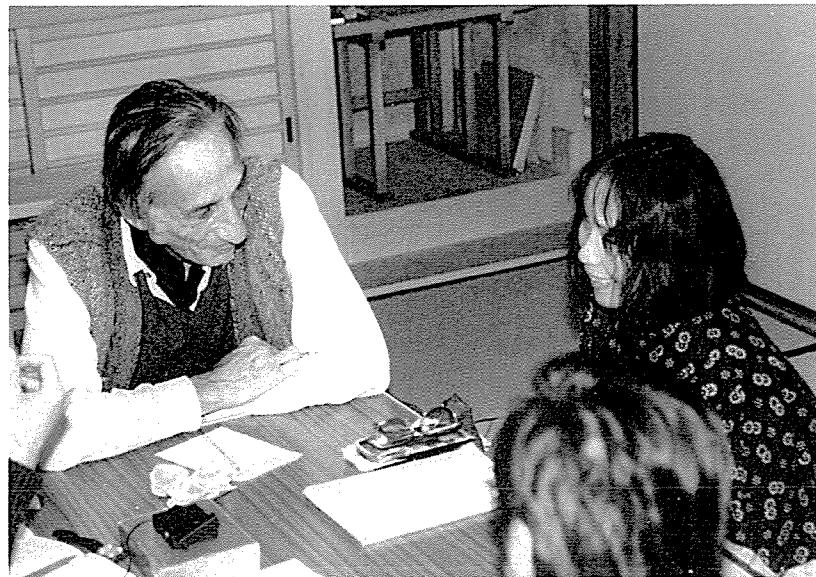
石牟礼 そのように思つていただければなんと光榮なことです。石牟礼 そのようにおつしやつていただけば望外のことです。

イリイチ そういう私の理解は、あなたの作品を正確に読んでいたということになるでしようか。

石牟礼

そのようにおつしやつていただけば望外のことです

切実でもつともアリケートなことだと私も思います。おつしやるような関係をつくれないかとひとごとならず日夜思いますがれども、そして、好もしいカップル、あるいはグループを



ミナマタは恐ろしい未来の前兆

イリイチ 同じようなシチュエーションが私たちにはありますね。

もう一つお聞きしたいのですが、ミナマタ以後の我々の課題というのは何なのでしょうか。第一のチツソに対して闘うという課題は、水俣において、日本において、また世界においてさまざまな仕方であります。

第二に、これとはまったく別の課題があります。それは、山の上にあるミナマタ研究所の正体を暴くという課題があります。ミナマタ以後、私たちに残されている課題はさまざまありますが、最も重要なのは、チツソに対する闘い、つまりチツソに対する科学的回答の正体を暴くことです。石牟礼さんが『苦海浄土』で書いたように、ミナマタは、さらに多くの恐ろしい未来に対する前兆なのです。

そしてもう一ついいたいのは、ミナマタ以降、人間が生きづらるためにどのような積極的力があるかを、あなたの作品は語っているのではないかということです。チツソに対する闘争、そしてチツソに対する科学的回答に対する闘争ということです。

石牟礼 国が建てた山の上の研究所には患者たちは行かないんです。

イリイチ でも研究所には学者がいて、水俣病患者を研究材

料にしているという事実があるわけですね。

石牟礼

生ま身の患者たちは診ないんですけれども、データを取り寄せてやつていると思います。今年わかつたんですが、水俣病審査会というのがあります。それは熊本県の行政がやっているんですけども、それが患者たちを篩いにかける、荒い篩いにかけてゆり落とすのです。なるべく患者だと認めません。同一家族で同じものを食べていて、一軒の家で認定したりしなかつたりということが出でたり、いくらか軽くみえる人が認定されたり、誰がみても重い人が落とされたり、とても恣意的な審査をやっています。去年ぐらいからでしょうか、そこに国立センターの人たちが加勢をしに行つてゐるんですね。それで、最近患者さん、ミスター・カワモトたちが熊本県庁に抗議に行つたんですね。それはどういうつもりかと尋ねました。国立センターの職員たちは、「ここは環境庁の出先機関であるから、東京の環境庁の人たちが、熊本県の行政に加勢をしに行けといったから行つたまでです」というふうであいで、生ま身の人間像にふれた答えになりません。そういうことを答弁して、患者たちは非常に怒つておりました。これはつい最近のことです。

イリイチ そういうことを私たち、真剣に取り組まなければいけない。しかし、別の次元の問題もあります。それについて深く考える人はとても少ないのですが、私たちが問題にしている地平は、どうやって精神的にこのような状況からぬけることができるかということです、絶望や幻想に捕われずに。石牟礼さん

ごく少数お見うけします。男が本来の男で、女が本来の性を開花させようとする、美しい両性的の種子の発芽を見るような関係を身近ににもみていますので、やはり埋めこまれているジェンダーの、求めあつてゐる手のイメージがあるので、おおよそは不毛な状態ではないでしようか。

イリイチ 私はジェンダーの関係というものが回復することを語つてゐるのではなくて、その「おき火」があるという事実を指摘したいわけで、そしてその「おき火」は現代という砂漠で生きている私たちにとっては、非常に必要なものではないかと思うんです。

石牟礼 「おき火」というおつしやり方は、私どもがその断念の中に描いていた詩篇という気がいたしますが、ほんとうにそれが一番頗るらしいことだと思います。ことに女たちは絶望の中でそれを願つていています。私たちはこれまで男であること、女であることあまりにもゆがめられて、それが身体化しているというか、心の状態もそのように出来上がってしまつて、自らどう解き放つたらよいかわからなくなっています。日々の人間関係は深い断念の中にあるのですけれど、それだからこそ人間がみえてくることもあります。男の方からジェンダーということを救出して下さったのをとても意味ぶかく思います。

は『苦海浄土』では、具体的な人間の問題を扱つていて、そしてそれは未来に何が起こるかということの一つのシンボルとなつてゐるわけです。そして一つの装置の中での技術的な変化は、実際には何も変化させません。エコロジストのたいていの抗議運動といふものは、技術的・科学的な解決を求めているのです。

石牟礼

それはいろいろあると思います。おっしゃるような、科学技術によつて問題を解決することを求める運動もあるのか、もしません。そして経済闘争もあるわけですが、水俣に限らず、公害問題に対する闘争というのは、原発反対の運動も含めて、ジレンマを抱えていて、自分たちがある程度の文明的な生活の中にどつぶりつかつていて、そういう運動を展開しなければならないという矛盾があるわけです。エコロジストの運動は問題の本質を何も解決しないのではないかとおっしゃつたことは、そういう意味では同感です。それから人間の心の深部の問題は、エコロジストたちの運動にかぎらず、運動というものになりにくのではないでしようか。運動といふものは建前をつくつて、それにそわないと排除する傾向がござりますから。今、人間の心のもつともデリケートなところが、食い荒らされておりますから。

イリイチ

その矛盾について議論したいですね。

石牟礼

このコタツも電気で、このように電化された暮らしをして、それで私はいま非常に悩んでいて、ある程度戻りして、もうちょっと不自由な生活、不必要的ものを切り捨てて思つては、これがなかなか実行するのが難しい。ましてやいるんですけど、これがなかなか実行するのが難しい。ましてや人間にとって最後に残されているのは、さつき科学技術では解決できないでしようとおっしゃいましたが、私ども人間にとって残されたいちばん最後の自然、これ以上破壊することのできない自然是、もう一度イメージし直さなければならぬ人間そのものであつて、そこに戻りたい。しかしそこに戻るには、近代といふこの途方もない化物を心やさしい物語り世界に編み替えて魂を吹きこまねばなりません。私は『苦海浄土』で、ありし日の桃源境にエンダーといふものを取り戻すことができて、ほんとうにエンダーといふものを取り戻すことができれば、世界をつくり替えることができるんでしょうけども、それをもし取り戻すことができれば。

人間にとって最後に残されているのは、さつき科学技術では解決できないでしようとおっしゃいましたが、私ども人間にとって残されたいちばん最後の自然、これ以上破壊することのできない自然是、もう一度イメージし直さなければならぬ人間そのものであつて、そこに戻りたい。しかしそこに戻るには、近代といふこの途方もない化物を心やさしい物語り世界に編み替えて魂を吹きこまねばなりません。私は『苦海浄土』で、ありし日の桃源境

一つの運動体の中での人間関係というものは、ある程度、デリカシイをそぎ落とさなければ成り立たないところがあります。人間あるいは集団とはなにか、とあらためて思うのですけれど。

世界変革の思想——あるべき人間の原イメージを取り戻す

小さな世界からのメッセージ——「じゃがたらお春」

石牟礼

これは半分はフイクションですので、そういう自分の憧憬を少しは投影させて書きました。私どもが生きている時代というのは、じつに荒涼とした時代で、いまいちばん気になるのは人間の精神が非常に衰弱していくつあるのではないか、といふことなんです。せめて絵空事でもこうありたかったという世界を描いてみたい。描いてみれば、傷だらけの小さな世界でございますけれども、その小さな世界から、非常に速いところへメッセージをとどけたいのですね。「誰か受け取つてください」と、つたないメッセージを送つておられるんですけれども、バーバラさんとイリイチさんにお届けできたのかなと感謝いたします。

イリイチ

私もはちゃんとやっていると思いますよ。もちろん全世界のレベルで、人類のためにという意味でそういうことはできないけれども、少なくとも具体的な人間から出発する道をさし示したことでは、この人間を、具体的な地域の結果として見ておられる。

私自身、古い地域を復活させようとは思いません。しかし、あなたがここでなさつておられることは、ジョンソン関係の回復ということではなくて、さつき言つた地域のため、ゲヌス・ロキのため、故郷のためのものだったと思います。

「じゃがたら文」というのが日本人の感性にすりこまれております。昔一人の混血少女が、長崎から追放されまして、お返事は全然期待できない故国へのたよりを海に流しました。潮

の流れに託してお手紙を書いた少女がいたといわれてまして、「じやがたらお春」とか、「じやがたら文」といわれています。鎖国時代に混血児はみんな海外に追い出されちゃつたんですね。あれはじやがたら、いまのインドネシアから海に流したたよりが、流れてきたのを誰かが拾つたというお話しですね。

—— あれは、考証する人びとによれば、日本国内でつくったんじやないかともいわれてるんですけど。

石牟礼 そうかもしません。それは母国、故郷を恋い慕つて書いた手紙なんですけども、私は書きます時に、いつも「じやがたら文」を書いているという気持ちがあるんですね。海に流す、そのつもりで書いておりますので、それをまあ、拾つて読んで下さる方がいて下さるのは、なんと思ひがけないことでしょう。

イリイチ そういう話を聞いて、私自身「じやがたらお春」になるんじやないか、新しい名前をみつけてうれしいです。

石牟礼 ほんとにものを書くというのはどなたが読んでくださるかわかりませんから、痛切な気持ちで書きりますよね。お気持ちよくわかります。

イリイチ それでは、もう一つ最後の物語をお話ししなければなりません。私はあなたとはまつたく違う世界からやってきた人間です。私の世界では、再生とか、生まれかわりとかいった観念は、公式に認められた観念ではありません。しかし、子供のころこうした問題をすいぶん熱心に考えたことを覚えています。

石牟礼 わたくしも。

イリイチ よくわかります。よくわかります（笑）。そして、こんなふうにも考えました。私はすでにもつと年老いた男になつていました。そして私は、ガンジス川のほとりのベナレスに長いあいだ座っていました。ベナレス、つまり、ヴァナラシ（ベナレスはヴァナラシの英語読み）は、ヒンドゥー人にとっての聖なる町です。その町を通つてガンジス、つまり、ガンガ（ガンジスはガンガーの英語読み）が流れているのですが、その河岸に私は長いこと座つていました。何か月もです。そこで私は、人びとが、死体となつて大きな薪の上で焼かれているのを見ていました。また、巡礼者たちを見ました。かれらは、老人で、ガンジスで一度でも沐浴するためにそこに来ているのです。かれらの希望は、かれらがそこ（ベナレス）にいれば、かれらが最後の死を死ねるのではないか、つまり、もうこれつきりの死を死ねるのではないか、ということです。しばらくたつて私は突然笑いだしました。そして自分に向かつて言いました。ともかくも「たとえ輪廻があったとしても」私は、この死が最後の死であるかのよう一度生きよう、と。

このことは、あの「じやがたらお春」のことなどにか関係があります。もうこれでお話しすることはなにもありません。

アリガト・ゴサイマシタ。

石牟礼 ああ、本当にめにかかるて懐かしく存じました。ありがとうございました。

